広島大学学術情報リポジトリ
Hiroshima University Institutional Repository

Title	終助詞に関しての考察
Author(s)	朴, 炳侖
Citation	日本語・日本文化研修プログラム研修レポート集 , 1990 : 23 - 30
Issue Date	1991-03-01
DOI	
Self DOI	
URL	https://ir.lib.hiroshima-u.ac.jp/00039280
Right	
Relation	

終助詞に関しての考察

朴　炳侖

1．はじめに

終助詞というのは、助詞の一種で、主として文の終わりに付いて疑問・感動・強め・禁止などの意味を表す語である。だからこそ、日常生活の会話には欠かすことのできないものであって、もし、それを使わずに話すとなれば、親近感のない、ただ客観的事実を述べるだけの索漠とした堅い対話になってしまうであろう。

それと同時に、終助詞というのは、間投助詞を除く他の助詞が、語と語の間の関係を明確にする役目を持っているに対して、この助詞は、文の判断全体を話しの相手に持ちかけ、関係づけをする役目を持っているため、この使い方を一歩あやまると、相手の感情を損ないかねない。

このように、話し言葉としては極めて重要な終助詞を見渡すことによって、日本語の向上はもちろん、もっと日本人を理解するきっかけになればと思う次第である。

2．終助詞の分類

終助詞の分け方には色々あるであろうが、ここでは二つを例に上げたいと思う。

その一つは、言語主体（話し手）による場面（聞き手）の把握のしかたを基準とした分類である。

つまり終助詞は、話しことばにおいては、頻繁に使用されるものであるが、論文や新聞記事など不特定多数の読者を予想する書きことばの場合には、ほとんど現れない。また、終助詞は、話し手が常に場面（聞き手）を強く意識している場合にのみ使用されるわけで、話し手が自己の感情を聞き手に直接伝えるものということができる。したがって、終助詞というのは、場面による制約を受けることの多い助詞である。

今年の広島はすごく暑かったぞ。

今年の広島はすごく暑かったよ。

今年の広島はすごく暑かったわ。

上の三つの終助詞の用法は、話し手と聞き手の関係が、上下の意識を持つ男性同志とか、親しい友人関係とか、女性であるとかによって差異が生じる。いいかえれば、場面に対する主体の立場の違いによっておこるものである。

以上のような観点から終助詞を二つに分けると、

(2)

a. 話し手の感情を強調するもの

ぞ・とも・よ・さ・わ・こと・な等

b. 聞き手の感情・反応をただすもの

か・ね・の・かしら等

に分けられる。

もう一つの分類方法は、終助詞が文表現の成立に関与するか否かによって分ける方法である。

例えば、

山陽高校は決勝に進みましたか。（質問）

もっとリラックスして打ちな。（命令）

気落ちするな。（禁止）

いや、見事な試合ですなあ。（詠嘆）

以上のような終助詞は、質問・命令・禁止・詠嘆といった、一定の文表現を成立させうるものである。これらの終助詞は、それが文末につくことによって、文表現を決定する性格を持っている。

また、次にあげる「の」は、文表現の成立に関与するのは同じであるが、ただ、それにはイントネーションの助けをかりる必要がある。

あしたから仕事に戻るの。（平叙）

あしたから仕事に戻るの？（質問）

あしたから仕事に戻るの！（命令）

すなわち、文末を下降調に発音すれば、この文は平叙文となり、文末に上昇調のイントネーションをつければ、質問文となる。また、文末を強く発音すると、命令の表現になる。したがって、この種の終助詞は、文末イントネーションを伴うことによって、文表現の成立に参加するものということができる。

一方、文表現の成立に関与しない終助詞を見てみると、これも二つに分けることができる。

a. 表現内容を相手にもちかける終助詞

b. 文末に余情を残す終助詞

a は、聞き手の注意を促して同調を求めたり、念を押したり、あるいは、話の内容を相手に押しつけたりするものである。b は、正統派の、まともな終助詞ではないが、終助詞と同じように使われ、文末に微妙な余韻・余情といったものを残すものである。これらは、主として接続助詞から転じて来たもので、本来、接続助詞などの後を言わずにすませた一種の切断表現から発達してきたものであり、a と同じく、文表現の成立には、まったく関与しない。

以上、二つの終助詞の分類方法について述べてきたが、ここでは、後者をもとにして、

一つ一つの終助詞に対してもう少し詳しく見ていきたいと思う。

3．文表現の成立に関与する終助詞

(1)文表現を決定する終助詞

①疑問

終助詞によって決定される文表現として、最も代表的なものは、疑問表現であり、これに用いられる、いちばん典型的な終助詞は「か」である。

「か」の疑問表現を四つに分けてみると、

a. イエスかノーかの答えを求める判断要求の質問

例：軽井沢に行ったことがありますか。

b. 疑問詞をもつ説明要求の質問

例：明日の日程はどうしようか。

c. 話し手の不確実な意志を表す言い方

例：まあ、十万ぐらいに勉強しときますか。

d. 聞き手に意志決定をゆだねた誘いかけの言い方

例：池の端まで歩いてみるか。

いずれにせよ、「か」による疑問表現の特徴は、話し手の不確かな態度を表すところに、その基調があるとされる。

また、用法の面では、敬体（デス・マス体）とも敬語表現とも共存するうえ、一般に、単独形においては、話し手の性別・年齢や、相手との関係、あるいは話の場面などによる使い分けを持たない点に、一つの特徴がある。

しかし、複合形の場合は事情は違ってくる。

a. この本の作者は誰だったんかね。

b. これもついでにやってくれないかい。

a の「かね」は、主として年輩者が、同輩あるいは目下に向かって使う。また、b の「かい」は、男が、打ち解けた場面でのみ使う。このように複合形は、こうした面での使い分けや制約をもっていることが多い。

また、このような複合用法においては、微妙な意味や独特なニュアンスが付け加わることがある。下の例文の「かね」は、時に、皮肉をこめた疑いを表わす。

ほんとうに、そんなにうまくいきますかね。

「か」による複合形は、まだまだ多くて、「かな」、「かしら」、「かも」、「もんか（ものか）」などがある。

これらを一つ一つ見てみると、

a. あの会社が、あぶないって、ほんとかな。

b. このお金、何に使おうかな。

c. 社長さんも、お見えになりますかしら。

d. まあ、百人ぐらいなら集まるかもね。

e. あの男が、金を出すものか。

f. あの店には、二度と行くもんか。

g. どこで、どう話が行き違ったものか。

「かな」は、単なる疑い（a）を表わすだけでなく、話し手の迷いや躊躇の気持ち（b）を表わす場合にも使われる。「かな」による質問は、主に、男の老人によって使われるのみで、やや古風な言い方になってしまい、現代では、「かな」は、もっぱら、上のような疑いの表現を担当している。しかし、これも、主として、独り言や親しい間の会話に限られ、フォーマルな場面に顔を出すことは、ほとんどない。

現代では、上のa・bのような表現の場合、女性は、「かな」の代わりに「かしら」を使うことが多い。この「かしら」の方は、「かな」に比べると、かなりフォーマルな会話にも用いられ、cのようなものは、女性の上品な言い方とされる。

最近、若い人々、特に若い女性の間では、「かも」も、使われるようになってきた(d)。これは、もちろん、ごく親しい間の会話に限られ、敬体と共存することはない。

そのほか、終助詞「か」をめぐるものの中で、いっぷう変わったニュアンスをもつものに「もんか（ものか）」がある。これは、否定へのひるがえりの、きわめて強い反語表現として使われるもの（e）や、拒否ないしは否定的な決意の表現（f）を表わすものとがある。これらは、いずれも、ある程度興奮した場面で、おもに男性が使う言い方である。

なお、比較的高い年齢層の男性の言い方として、話し手の疑いや迷いを反語的に述べる、gのような表現もある。

②詠嘆

a. いや、素晴らしいですなあ。

b. まあ、素敵だわあ。

c. うむ、見事じゃのお。

aは男が使い、bは女が使い、cは年輩の男が主に使うというように三つに分けられる。

③命令

a. 解答は、すべて解答欄に記入せよ。

b. もっとゆっくり話しな。

c. 時間がないから、早くせい。

aの「よ」による命令は、書きことば的な、やや古風な表現といえる。警察・学校などの公的な命令や、事務的な指示では、口頭語として登場することもあろうが、普通の会話に使われることはない。標語・掲示・文書などに使われる。

bは、動詞の連用形について命令を表わす「な」で、これは、家族や親しい仲間の間の

プライベートな会話で、主に男性によって使われる。

ｃは、あまり上品な言い方ではなく、ごく限られた動詞について、男性の乱暴な命令を表わす。

④禁止

禁止の表現を表わす、最も代表的な終助詞は、終止形につく「な」である。

a. 無駄遣いをするな。

b. 不平をおっしゃいますな。

ａやｂのように、敬体や敬語とも共存し、性別・年齢層の区別なく使われ、場面的な制約もあまりない。しかし、現代では、目上に対する場合や、フォーマルな場面では、この「な」による言い方よりは、「～しないで下さい」・「～なさらないで下さい」などの形を使う傾向が強い。

⑵文末イントネーションを伴って文表現を決定する終助詞

この種の終助詞としては、「の」・「て」・「こと」があげられる。「の」に関しては、前で言及したので、ここでは、「て」・「こと」について述べていきたい。

a・さあ、早く立って！

b. おじさんに返事出して？

c. なにか、お飲みになりまして？

d. また、こんないたずらして。

まず、「て」のことであるが、ａのように文末を強く発音すると、命令ないしは勧誘を表わす。また、ｂのような上昇調では、質問の表現を構成し、これは女性特有な言い方である。これを、敬語・敬体とともに用いた、ｃのような言い方は、上品な、やや気どった言い方とされる。ｄのように文末が、下降調に発音されると、一種の確述の表現となる。これは、やや年輩の人々の身内・仲間内の会話に、よく見られる言い方である。

a. 今夜、お電話していいこと？（上昇）

b. まあ、素敵なお部屋だこと！（下降）

c. 正午までに駅前に集まること！（強勢）

上の例文のうち、ａ・ｂは、女性専用の、上品な言い方である。しかし、最近の若い女性の間では、「こと」による質問や詠嘆の表現は衰退しつつある。ｃのような命令を表わす「こと」は、教師が生徒に対して、あるいは、上官が部下に対して指示する場合など、監督する立場の者が、命令を下すような場面で見られるのみで、一般の会話には、ほとんど出て来ない。

４．文表現の成立に関与しない終助詞

⑴表現内容を相手にもちかける終助詞

a. あした、泳ぎに行くぜ。

b. これは、いいステレオだぞ。

c. これは、容易ならぬ事態ですぞ。

d. バスが、迎えに来たわ。

e. はい、私がお迎えに伺いますわ。

f. ああ、車で、すぐ行くわ。

aやbのように「ぜ」・「ぞ」は、男性の仲間うちの会話に限られ、上品なものとはされない。特に「ぜ」には、乱暴な語感が伴う。敬体・敬語とは共存しうるが、cのような用法は、年輩の男に限られる。

また、「わ」は、dのように、軽い上昇調のイントネーションを伴って、女性の間で使われ、これは、日常会話だけでなく、かなりフォーマルな場合にも現れる。もちろん、eのように敬体・敬語とも共存しうる。また、fのように、男性の会話にも、「わ」は出てくるが、これは、下降調に発音される。この言い方は、上品とはいえない。

g. ぼく、その本、読んだよ。

h. ね、おとなしくしてるのよ。

gの「よ」は、男性の仲間のうちの間で用いられるもので、下降調のイントネーションあるいはストレス・トーンを伴う。これに対して、hは、女性の間で使われる「よ」で、軽い上昇調のイントネーションを伴う。ただし、これは、常に「わよ」・「のよ」・「ことよ」などの複合形で現れる。

i. もっと、こっちへいらっしゃいや。

j. ちょっと待ってくださいましな。

iの「や」は、もっぱら命令文の文末に用いられる男性専用の終助詞である。これは、比較的高い年齢層の人々が、ごく親しい間で用いるものであるが、全体的に見て、あまり上品な言い方ではない。

この男性の「や」に対応するものとして、jのような女性の使う「な」がある。これも、命令文の文末に現れ、比較的高い年齢層の人々の、仲間うちの会話に用いられる。

k. あ、雪が降って来たい。

l. 早くしろい。

m. 井上君の住所、知ってるかい。

kのような「い」は、男の子たちの特有な言い方であるが、ぞんざいな言葉づかいとして、親や教師に咎められることの多い言い方である。また、lのように命令文に「い」がつけば、ぞんざいな荒々しい言い方になる。それに対して、mのように質問文に「い」がつけば、それほど荒っぽい言い方ではなく、男の日常の会話にも、かなり広く使われる。

(2) 文末に余情を残す終助詞

この類の中で、最も典型的な終助詞は、逆接の接続助詞に由来する「が」・「けど（け

れど）」・「のに」の三種である。

a. はい、お値段は、三千五百円ですが。
　食堂は、八階になっておりますけど。

b. 書類は、秘書課の方にお回ししましたが。
　東京までは三時間ほどと存じますけど。

c. おやじの方からはうるさく言ってくるがね。
　和子さんも来ると思うんだけどな。

まず、「が」・「けど（けれど）」に関してみると、aのように、現代では、店員や案内係などの接客サービスのことばに特徴的に現れてくるものもあれば、bのように、断定を避けて、ものやわらかに言い収める婉曲表現の一つとして発達してきたものもあり、cのように、同僚や目下あるいは仲間うちで、話されるものもある。

d. もっとゆっくりしていけばいいのに。

e. あんなに注意しておいたのに。

「のに」は、dの方は、文末に、不本意ないしは心残りといったニュアンスを盛りこむもので、eの方は、不本意から転じて、なじるような調子を感じさせるものである。どちらも、性別・年齢層などに関係なく、広く使われるが、後者のなじるニュアンスの「のに」は、もちろん、目上や客に対して用いることはできない。前者の心残りを表わす言い方は、日常会話ばかりでなく、フォーマルな場面にも現れる。

5．終わりに

今まで見てきたように、終助詞の使用には、話し手の性、聞き手の自分（独り言）・他人、話し手と聞き手の社会的関係、話の場の公私などが前提条件となる。しかし、外国人が日本語を学ぶうえで、これらの事を理解するためには、本だけではとても難しいことだと思う。こうした自分の感情をうわのせできる言葉を体得するためには、やはり、本場にいって、本場の人とぶつかりあって、本場の習慣などを知ってこそのことであろう。

事実、私も日本に来て覚えたものの中で、今でも印象的なことが二つある。

その一つは、はじめ、ものを言うとき、特に見知らぬ人同士では、やたら「すみません」を濫発することである。はじめは理解しにくかったが、今ではとても便利な言葉だと理解するようになってきた。

もう一つは、敬語のことであるが、たとえば、店で若い客が、自分より年輩の店員に、仲間あるいは目下の人に使うような言葉を使ってもそれがかなりまかり通るようである。自分の国では、年齢差が、かなり言葉づかいに大きな影響を与えているのだが、やはり、これもはじめは理解しにくいものの一つであったが、だんだん、“日本人は職業意識に徹底しているんだな”とか、“日本人のものの考え方の基準は、西洋みたいに、歳ではなく、実力になってきたのかなあ”と思えるようになってきた。

いずれにせよ、外国人にとって終助詞というのは、使う機会も少ないし、使おうとしても、結構、勇気もいるし、また、難しいものでもある。

しかし、こうした機会を得ることによって少しでも終助詞を使いこなせるようになって、それによって、心のこもった話し方ができるようになり、もっと相手を理解できるようになれば、個人同士だけではなく、さらに進んで、国同士の真の友情の芽生えにもつながるというのは、飛躍のしすぎであろうか。

最後に、このレポートをはじめ、一年間あらゆる面でお世話になった、多和田　眞一郎先生に心からお礼のことをいいたい。

参　考　文　献

1．大野　晋、「助詞の機能と解釈」『国文学　解釈と鑑賞』35：13、1970
2．大野　晋・竹内　美智子・山口　明穂・北原　美紗子・西田　直敏・安田　章・田中章夫、『岩波講座　日本語７　文法Ⅱ』、岩波書店、1977
3．北川　千里・鎌田　修・井口　厚夫、『外国人のための日本語例文・問題シリーズ⑦助詞』、荒竹出版、1988
4．国立国語研究所、『現代語の助詞・助動詞－用法と実例－』、秀英出版、1951
5．此島　正年、『助動詞・助詞概説』、桜楓社、1983
6．新村　出、『広辞苑』、岩波書店、1983
7．松村　明、『古典語現代語助詞助動詞詳説』、学燈社、1969
8．渡辺　実、「終助詞の文法論的位置」『国語学』72、1968